



君津市三直貝塚出土の異形台付土器
(むら・金のすず)

君津市鹿島台遺跡出土の黥面埴輪
(むら・金のすず)



木更津市笹子城跡出土の水晶製五輪塔
(むら・金のすず)



平成 27 年度出土遺物公開事業「館山道の遺跡展」

はるかかなる 西上総の歴史



木更津市土器崎遺跡出土の堅櫛
(参考展示: 金のすず)



袖ヶ浦市上宮田台遺跡出土の動物形土製品
(参考展示: 袖博)

君津市三直中郷遺跡出土の犬足
(むら・金のすず)



() 内は展示開催館略称

展示開催館 ※開催館により展示内容が異なります。

千葉県立房総のむら

印旛郡栄町龍角寺1028 ☎0476-95-3333

7月18日(土)～9月23日(水・祝)

【休館日: 7月21日・27日、8月3日・10日・17日・24日・31日、9月7日・14日】

木更津市郷土博物館金のすず

木更津市太田2-16-2 ☎0438-23-0011

10月24日(土)～12月23日(水・祝)

【休館日: 10月26日、11月2日・9日・16日・24日・30日、12月7日・14日・21日】

袖ヶ浦市郷土博物館

※袖ヶ浦市内の遺跡展示

袖ヶ浦市下新田1133 ☎0438-63-0811

平成28年1月5日(火)～2月14日(日)

【休館日: 1月12日・18日・25日、2月1日・8日】

【解説会: 1月16日(土)・2月6日(土) 11時30分～12時30分】

講演会

※詳細は当財団文化財センターにお問合せください。

平成27年11月7日(土) 午前10時30分～午後3時30分

会場: 君津市生涯学習交流センター多目的ホール

(市役所・中央図書館隣)

JR 内房線君津駅南口から徒歩10分

君津市久保 2-13-2

当日
先着受付
250名

講座

※詳細は各会場にお問い合わせください。

平成27年7月26日(日)

午後1時30分～午後3時

会場: 千葉県立房総のむら

講師: 財団職員 小林清隆

平成28年1月23日(土)

午後1時30分～午後3時

会場: 袖ヶ浦市郷土博物館

講師: 財団職員 橋本勝雄

【主催】(公財)千葉県教育振興財団 【後援】千葉県教育委員会・木更津市教育委員会・君津市教育委員会・富津市教育委員会・袖ヶ浦市教育委員会

【協力】木更津市郷土博物館金のすず・袖ヶ浦市郷土博物館

【問合せ先】(公財)千葉県教育振興財団文化財センター ☎043-424-4850 http://www.echiba.org/bunkazai_top.html

ごあいさつ

千葉県では、年間450件ほどの発掘調査が行われ、房総各地の歴史と文化を伝える貴重な成果が数多く得られております。当財団の調査成果については、遺跡見学会や展覧会をはじめ、ホームページや広報紙『房総の文化財』などの刊行物等で順次ご紹介してまいりました。

今回企画した展覧会は、館山自動車道(東関東自動車道千葉・富津線)の建設に伴って調査された多くの遺跡の中から、西上総の地域にあたる袖ヶ浦市から富津市にかけての主な遺跡の調査成果を、平成27年度出土遺物公開事業「館山道の遺跡展－はるかなる西上総の歴史－」と題して紹介するものです。

西上総地域の歴史を築いてきた旧石器時代から中世にかけての多様な文化の様相を感じていただき、埋蔵文化財保護へのご理解をお願い申し上げる次第です。

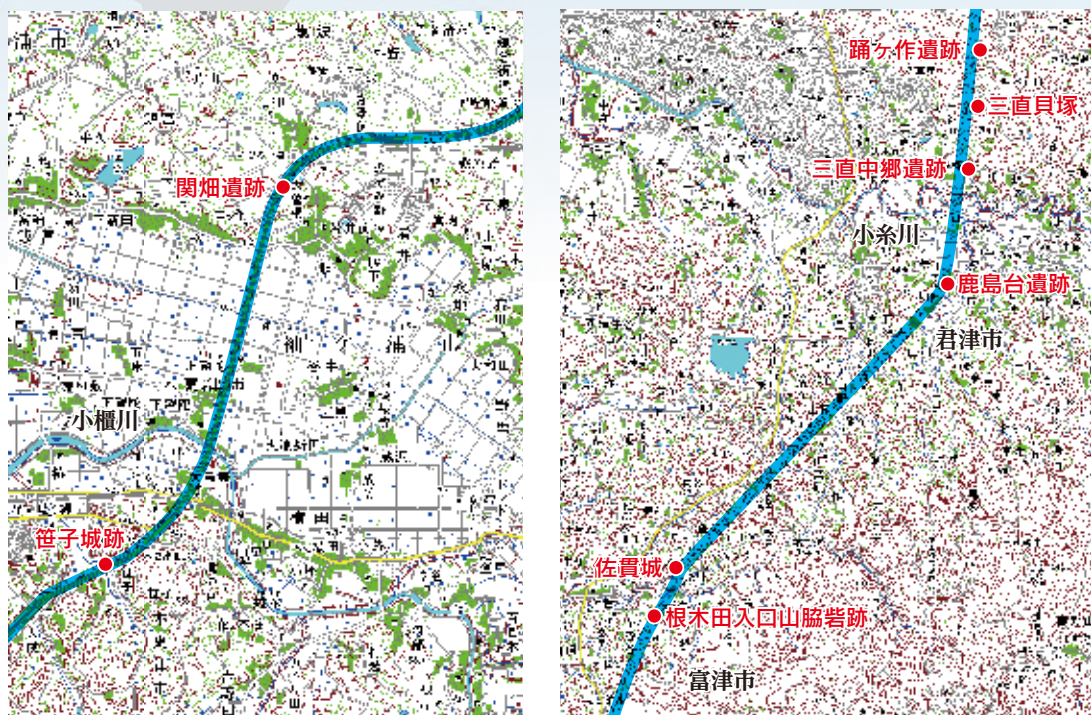
最後になりましたが、ご協力をいただきました関係機関並びに関係者の皆様に、心からお礼申し上げます。

公益財団法人 千葉県教育振興財団

- | | |
|----|--|
| 凡例 | 1 本図録は、平成27年度出土遺物公開事業「館山道の遺跡展」の展示解説図録です。 |
| | 2 展示資料のうち、袖ヶ浦市関畑遺跡は袖ヶ浦市教育委員会、他はすべて千葉県教育委員会所蔵です。 |
| | 3 本展示は、文化財センター長 小久貫隆史・整理課長 岸本雅人の指導のもと、上席文化財主事 栗田則久が担当し、図録の執筆及び編集も栗田が行いました。 |

館山自動車道

館山道(東関東自動車道千葉・富津線)は、千葉市中央区の京葉道路から富津市の富津竹岡1Cに至る路線延長55.7kmの高速道路として、東日本高速道路株式会社(NEXCO東日本)によって計画されました。2期に分けて事業化され、1期目の千葉・木更津線の発掘調査は、路線内に所在する27遺跡を対象に、昭和63年度から平成6年度まで、2期目の木更津・富津線は、平成9年度から平成18年度まで、25遺跡を対象に発掘調査が行われました。調査された遺跡は総数52遺跡に及び、その後の整理作業を経て合計25冊の発掘調査報告書が刊行され、多くの貴重な成果を得ることができました。



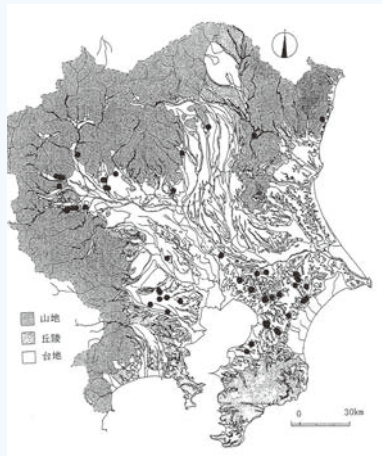
館山道と遺跡の分布

I 文化のあけぼの

旧石器時代

第四期更新世(約260万年～1万3千年前)において、狩猟や採集の存在が確認された時代を旧石器時代と呼んでいます。房総では、最終氷期後半期に相当する旧石器時代の遺跡が確認されています。この時期は、一般的に寒冷で、気候変動も激しいものでした。そのため、海水面の大幅な低下による海岸線の後退が想定されています。

館山道の路線内では、数多くの旧石器時代の遺跡が調査され、立川ローム層のX層(約3万5千年前)～Ⅲ層(約1万3千年前)までの各時期の石器が発見されています。特に、袖ヶ浦市関畑遺跡^{せきはた}では、X層上部～Ⅸc層下部から60mほど離れた2群の環状ブロックが発見されました。

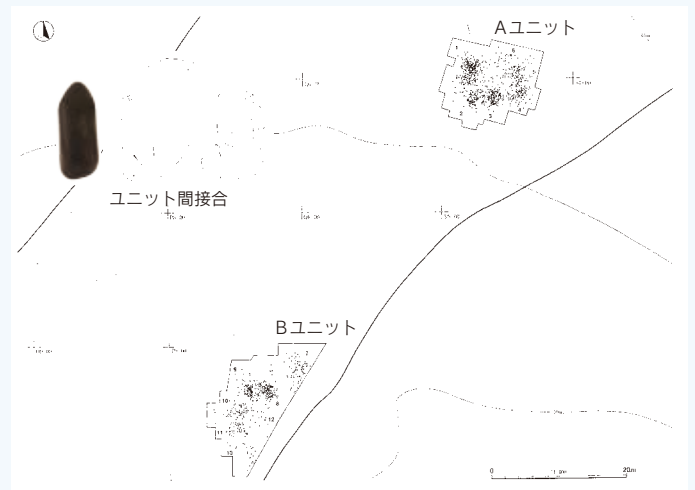


関東地方の環状ブロック分布図

環状ブロックとは

石器のまとまり(ブロック)が円環状に配置され、中央部分に広場状の空間が認められる景観を示すものを環状ブロックと呼んでいます。現在から約3万5千年前～3万年前の限られた期間のみに関東地方を中心に広く分布しています。県内では、北総地区に集中する傾向がうかがえます。袖ヶ浦市関畑遺跡の例は房総における分布範囲の南端に位置しています。

その性格についてはいまだ明らかとはなっていませんが、人びとのさまざまな活動を示しており、ある意味では集落(ムラ)としての機能を有していたのでしょう。



環状ブロックの分布とブロック間接合

袖ヶ浦市関畑遺跡

本遺跡からは総数3,448点の石器が発見されました。その中で注目されるのが、第1文化層(X層上部～Ⅸc層下部)に広がっている2か所の環状ブロックです。約60m離れたAユニット(直径12m～13m)とBユニット(直径20mほど)間で石器の接合が確認されました。このことは、2つの環状ブロックが同時に形成され、お互いに緊密な関係を持っていたことを示しています。



第1a文化層Aユニット

このユニットは、6か所のブロックで形成され、出土した石器数は825点を数えます。主な器種は、ナイフ形石器やこの時期に特徴的な台形様石器、楔形石器^{くさび}などで、使われた石材のうち、596点(72%)は千葉県南部の嶺岡産珪質頁岩^{たけがき}と、非常に高い割合を示しています。

第1a文化層Aユニット(X層上部～Ⅸc層下部)の石器



現地表面

約1万3千年前
約2万年前
約2万4千年前
約2万5千年前
約2万6千年前
約2万8千年前
約3万年前
約3万5千年前

土層の堆積状況(参考:印西市復山谷遺跡)

Ⅱ 環状の大きなムラ

縄文時代

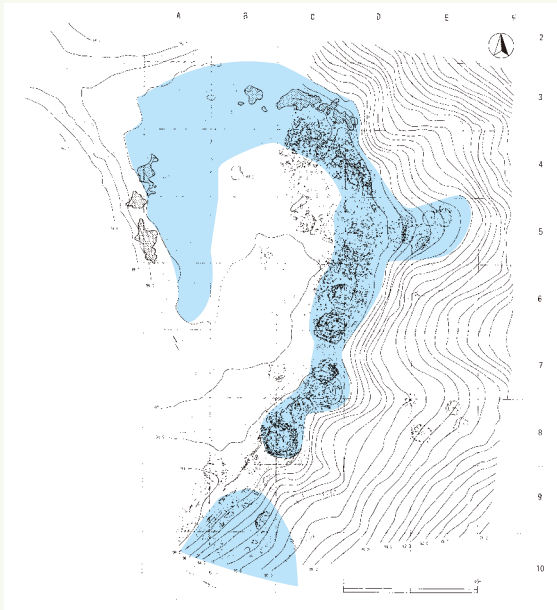
旧石器時代から縄文時代へと移行する時期は、地球規模で温暖化が進み、環境の変化とともに生活にも大きな変革が起こり、様々な道具が作られました。そのはじまり(草創期)は約1万3千年前、終わり(晩期)は約3千年前と考えられています。

館山自動車道路線内でも縄文時代の数多くの遺跡が調査されていますが、特に今回取り上げた君津市三直貝塚は、「環状盛土遺構」の典型的な例として広く知られるようになりました。

君津市三直貝塚

三直貝塚からは46軒の竪穴住居跡や土坑・炉跡などが環状盛土遺構とともに確認され、集落の形成時期は、縄文時代中期後半から晩期中葉までとなっています。

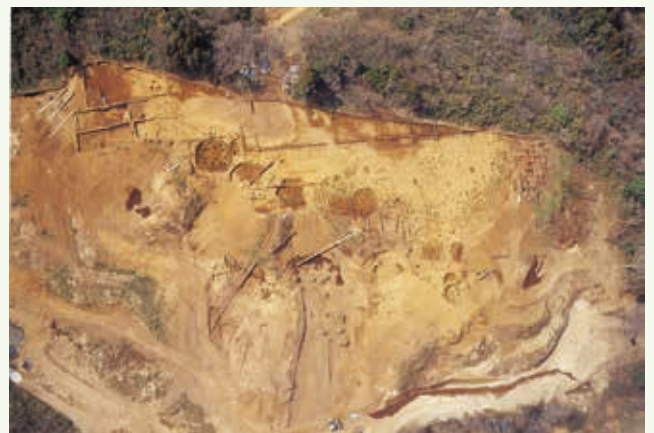
君津市教育委員会による三直貝塚西側の調査を含めると、南側に開口部をもつ馬蹄形の「環状盛土遺構」となる可能性が高まりました。その大きさは、南北方向で約140m、東西方向で約100mと想定されます。



三直貝塚の遺構と盛土の広がり

環状盛土遺構とは

内側の削平した土を利用して、外側部分に環状に土を盛って高まりを作っている形状から、「環状盛土遺構」と呼ばれています。このタイプの集落形成は、縄文時代後期の加曾利B式期以降晩期まで続く例が多いようです。



三直貝塚全景

丘陵縁辺に延びる盛土遺構は、南側と北側で様相が大きく異なり、南側は盛土の高さが高く、竪穴住居が密集して営まれるのに対し、北側の盛土は低く、ピットが集中するものの竪穴住居はほとんど確認されません。

南側部分の竪穴住居の多くはローム土で短期間に埋め戻されており、比較的長期にわたって埋土と盛土が繰り返された結果、中央部平坦面との比高が2mにも及ぶ高まりになったものと思われます。



グリッドから出土した玉類

三直貝塚で出土した玉類は、ムラ共同の祭祀的な行為に使われた可能性があります。特に、ヒスイ製の犬珠や勾玉などの貴重品からは、このムラにはかなりの有力者が存在していたことが考えられます。



石棒

竪穴住居の西壁に沿って7点の石棒が見つかりました。写真の石棒は、雲母片岩製の完形品で、長さ87cm、重さ6.3kgと大きなものです。



異形台付き土器



独鈷石

密教法具の独鈷杵(とくこし)に形が似ていることから「独鈷石」と呼ばれています。砂岩製で、長さ15.5cm、重さ382gを測ります。



中空のミミズク土偶

Ⅲ 濠を巡らせたムラと墓

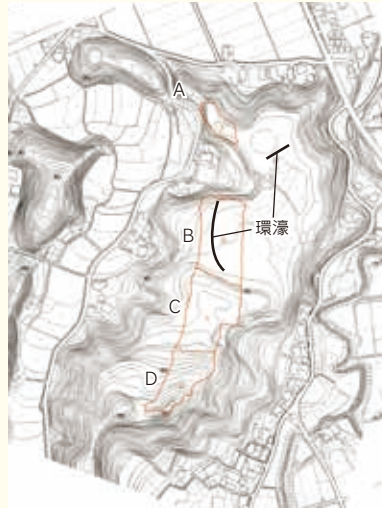
弥生時代

周囲に濠を巡らせた「環濠集落」は、農耕文化とともに朝鮮半島から九州に伝わり、その後、北陸や関東地方までの広い範囲にこのような集落が及んでいます。環濠を伴うムラは各地の中心的な位置を占めています。西日本の遺跡では、武器や殺傷された人物の墓などが見つかっており、外敵への防御を目的に築かれたようですが、関東地方の遺跡では武器の出土が少なく、濠の規模もそれほど大きくないことから、防御以外の性格も考えられます。

君津市鹿島台遺跡

遺跡全体での弥生時代の竪穴住居総数は245軒と県内でも屈指の規模を誇り、他に環濠2条と方形周溝墓22基、再葬墓1基などがみついています。

ムラの開始時期は、弥生時代中期の宮ノ台式土器の時期で、当初から比較的大きなムラが形成されていました。



B区から小糸川低地を望む

鹿島台遺跡の環濠

鹿島台遺跡では、B区を縦断するように2条の蛇行する濠が確認されました。近年実施された君津市教育委員会の確認調査で、A区とB区の間にある谷の北東側から、B区の環濠に続く東西に延びる環濠が見つかっており、台地東側を半円状に区画する可能性ができました。



方形周溝墓

近畿を起源とする墓で、西の文化の影響を強く受けた墓の形といえます。方形に巡る溝の四隅が途切れて通路状となっているのが弥生時代の方形周溝墓の特徴です。新しくなるにつれて、通路状の部分が少なくなり、古墳時代になると溝は全周し、やがて内部に盛土が積まれた方墳へと変化していきます。

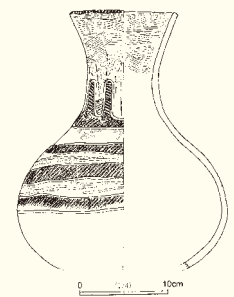
再葬墓

遺体を一度土葬し、その後白骨化した人骨を壺などに入れて再び埋葬することから、「再葬墓」と呼ばれています。この時代の再葬墓は東北地方南部や北関東に起源があり、使用された壺も北関東の影響を受けたものが主体となっています。

房総では、鹿島台遺跡のように、東日本の墓制である再葬墓と西日本の墓制である方形周溝墓が同じ地域で見つかる例もあり、複雑な様相を示しています。



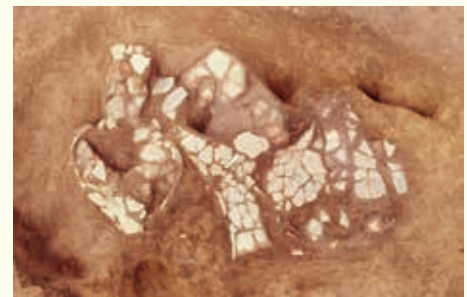
A区の方形周溝墓



方形周溝墓から出土した壺



再葬墓から出土した壺



3個の壺が埋められた再葬墓

IV-1 弥生時代から古墳時代へ

古墳時代

古墳時代のはじめ頃は、弥生時代の影響を残す集落がみられる一方で、畿内や東海・北陸地方の土器やその影響を強く受けた土器がムラに入ってくることにより、新たな時代の幕開けを迎えるようになりました。

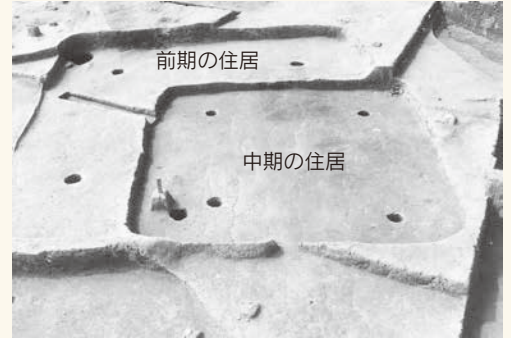
このような土器は県内各地で見つっていますが、特に市原市から富津市にかけての西上総を中心とした東京湾東岸地域に集中しています。西からの文化や人びとが東京湾を渡って移動してきたことを示すものです。

君津市鹿島台遺跡

遺跡全体での古墳時代の竪穴住居総数は177軒と弥生時代に次いで多数確認されています。弥生時代の中心であったB区に継続して営まれ、その後の中期になると南側のC区やD区に中心が移っていきます。一方で、後期になると急速に集落が衰退し、古墳を主とした墓域に変容していきます。

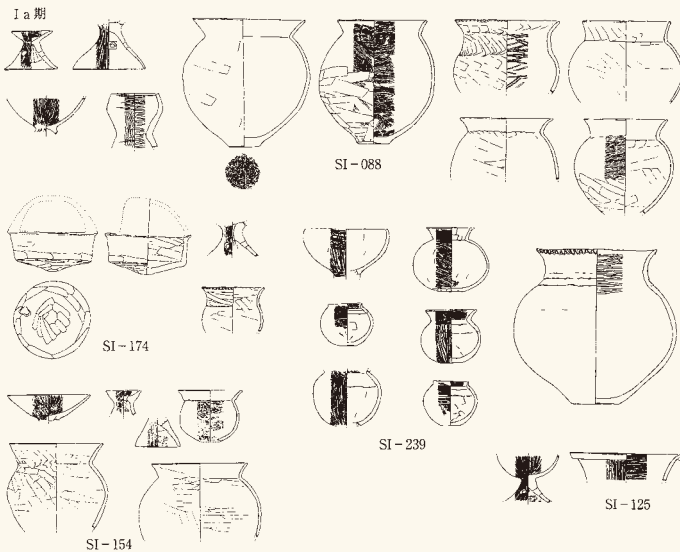


鹿島台遺跡B区の古墳時代集落変遷図



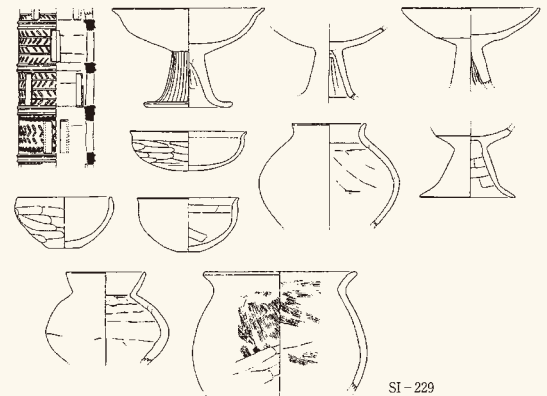
重なり合った古墳時代の竪穴住居跡

古墳時代前期の竪穴住居を切って中期の竪穴住居が掘り込まれたようすがわかります。

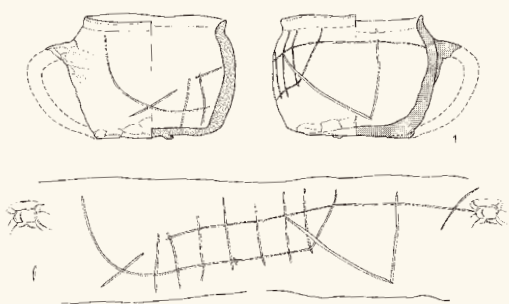


古墳時代はじめ頃の土器（Ⅰ期、約1,700年前）

鹿島台遺跡では、東海地方の影響を受けた土器が多く、他には畿内に特徴的な土器もいくつか見られます。弥生時代の環濠集落や方形周溝墓をもたらした東海地方の人びとが、古墳時代になって新たに開発と移住を繰り返して大規模なムラを作り上げたのでしょう。



古墳時代後期はじめ頃の土器（Ⅲ期、約1,550年前）



舟の絵の展開図



竪穴住居跡から出土した舟の絵が描かれた須恵器

コップ形の把手付碗の舟の絵は、舟体を横からみて、土器の側面をほぼ一周するように描かれています。図の左が船首、右が船尾となり、中間に櫂などを表現した直線が8本確認されます。船尾に描かれたV字状の線は、舵のようなものでしょうか。

この絵は生産地（畿内）で須恵器が焼かれる前に描かれており、この須恵器を携えて海を渡ってきた人の姿が浮かんできます。この時期に移住してきた西方の集団が航路の安全を願っていたのでしょうか。

IV-2 古墳時代中期以降の古墳

古墳時代

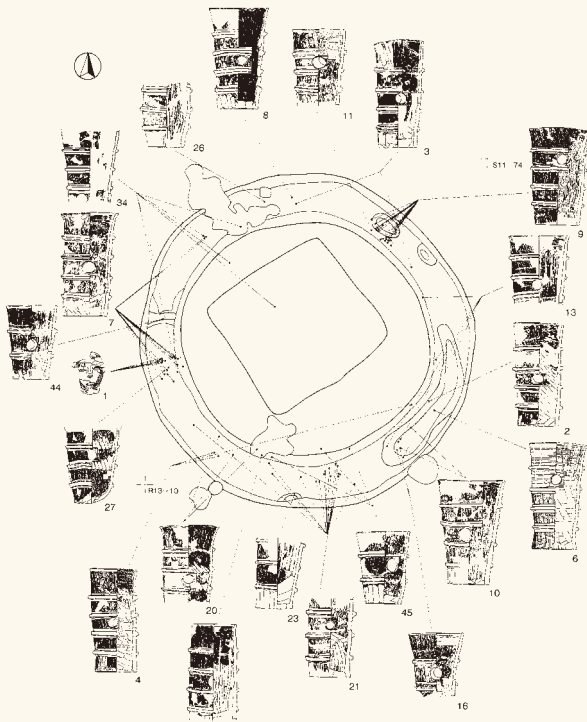
古墳は、ヤマト政権が地方を中央集権的な体制に組み込んでいく状況を反映したものです。房総には3世紀中頃に出現し、5世紀の大型古墳の時期を経て、6世紀以降群集墳として数多くの中小古墳が展開していきます。鹿島台遺跡の古墳群は、古墳時代中期から後期に移行する5世紀後半頃～6世紀中頃までの比較的短期間に営まれた古墳群と考えられます。中でも、5世紀後半頃の古墳から見つかった畿内産の須恵器や黥面(入れ墨)埴輪などは、古墳時代のムラと同様、外来的な色彩を強く残しています。

君津市鹿島台遺跡

本遺跡では、古墳時代前期と思われる小形の方墳と5世紀後半以降の円墳の合計15基の古墳が確認されています。その変遷を見ると、台地先端部のA区に古墳時代前期の方墳、5世紀後半以降には遺跡全体に円墳が築かれ、最終的に台地先端部に中規模の円墳である4号墳が営まれます。この中では、B区北側に位置する3号墳が注目されます。



鹿島台3号墳全景



鹿島台3号墳の埴輪分布図

この古墳は後世に塚として改変されたようで、埋葬施設は残っていませんでした。規模は直径24mを測り、幅4mほどの周溝が巡っています。

周溝から多くの円筒埴輪が出土しました。周溝全体に広がっており、本来は墳丘の縁辺部に埴輪が立て並べられていました。また、鯨面埴輪が見つかった場所は周溝が一段浅くなっており、墳丘への出入り口と考えられます。

鯨面埴輪は、魔除けの性格が考えられる「盾持ち埴輪」の顔の部分と思われ、この場所に立てることによって外部からの悪霊の進入を防いでいたのでしょう。



円筒埴輪に刻まれた記号

4条5段と2条3段の円筒埴輪

円筒埴輪は、胴部に貼り付けられた凸帯が、4条のものとは2条のものとの大小2種類が見られます。また、焼成前に記号のような模様が刻まれる例が多くあります。4条の凸帯と記号の組み合わせは、富津市内裏塚古墳の円筒埴輪にも見られ、その共通性がうかがわれます。



鯨面埴輪

この鯨面(入れ墨)埴輪は、顔のみで全体像は不明ですが、他の例を考え合わせると、「盾持ち埴輪」となる可能性が高いと思われます。線刻の鯨面は眉毛の上から顎の部分まで刻まれ、眉毛の上と顎は斜線、他は格子となっています。また、口にはいくつものくぼみがあり、白い石などをはめ込んで歯を表現したようです。

鯨面埴輪の例としては全国でも最古級の資料となります。

V-1 米づくりと条里制

奈良・平安時代

律令体制の基礎となる「班田制」の実施は、大化の改新(645年)前後に始まったとされています。この整備に伴う条里制も、「三世一身法」(723年)や「墾田永年私財法」(743年)によって、開墾地の私有が許されるようになると、貴族や豪族などの有力者層や大寺院による大土地私有を目指した開墾が進められるなかで崩壊していき、それが後の荘園へとつながっていきました。

房総では、上総から安房地域にかけて条里制の痕跡が見つっています。ただ、発掘された土器などから想定される条里の年代は、8世紀後半頃～11世紀にかけての時期です。この状況は全国的にもほぼ同様な状況にあります。



三直中郷遺跡(沖田地区・中郷地区)全景

君津市三直中郷遺跡

遺跡の中央を横断する県道君津鴨川線を境に北部と南部で遺構の内容が全く異なることから、北側を沖田地区、南側を中郷地区として調査が進められました。

沖田地区では奈良・平安時代の水田畦畔跡や多量の木製品、中郷地区では奈良・平安時代から中・近世にいたる掘立柱建物跡群が確認されました。中郷地区の掘立柱建物跡群は、8世紀後半～9世紀後半まで約100年間存続し、一方、沖田地区の水田は、周辺の条里制遺跡の例から考えると、中郷地区の建物群の時期とほぼ同時期に機能していたようです。



東西方向に走る畦畔跡と木製品出土状況

沖田地区の畦畔(田のあぜ)

畦畔の痕跡をたどっていくと、ほぼ南北方向と、東側に15°・25°・45°軸が振れる4方位の地割りが確認されており、ほぼ100年の間に3回の地割り変更が行われたようです。



大足の出土状況

大足は、肥料となる青草や稲株を泥の中に踏みこみ、表面を平らにするための農具で、重いためにくりつけた縄を持って使用したようです。ほぼ完全な形で発見された例は少なく、貴重な資料となっています。



中郷地区の掘立柱建物跡群



田下駄の出土状況

田下駄にはいくつかの種類があります。写真の田下駄は輪カンジキ型と呼ばれ、稲刈り等で足が深く沈まないように履くものです。

中郷地区では奈良・平安時代の掘立柱建物跡が16棟確認されています。建物群の時期は、わずかに出土した柱穴内の土器の年代から、8世紀中頃～10世紀前半頃と思われます。建物の規模は、3間×2間程度が主体的ですが、3間×2間の身舎の周囲にひさし廂が付く建物や片廂建物など、格式の高い建物も含まれています。このことから、中郷地区の建物群は、北側の沖田地区で発見された水田からの収穫物の管理に関係したものと考えられます。

V-2 火葬の広がり

奈良・平安時代

千葉県内の骨蔵器埋納火葬墓分布図
 (『千葉県の歴史 資料編 考古4』より転載)



奈良時代になり、それまでの古墳の築造が「薄葬令」(646年)などにより規制されるようになると、仏教の葬法である「火葬」が有力者の間で採用されるようになります。発掘調査によると、房総での火葬墓の始まりは8世紀前半に始まり、9世紀前半にピークを迎え、10世紀以降は急速に減少する状況が認められます。全国的にみると、房総での発見数は大阪府に次いで2番目に多い地域となっています。

その分布を見ると、房総を縦断するように帯状に広がっています。特に、市原市から君津市にかけての東京湾岸西上総地域及び印旛沼北岸の成田市・栄町周辺に集中しています。



踊ヶ作遺跡火葬墓分布図

おどりがさく 君津市踊ヶ作遺跡

火葬墓23基と骨蔵器埋納土坑17基が、周囲を谷に囲まれた小さな台地上に密集して営まれています。この時期、墓地として土地利用されたようです。

骨蔵器の蓋として再利用された杯などの様相から、8世紀前半～9世紀後半頃まで継続的に埋納行為が行われていたことが確認されます。



石櫃(外容器)内に納められた骨蔵器とその断面

本遺跡で唯一確認された、石櫃の中央をくり抜いて骨蔵器を納めた火葬墓です。石櫃は軟質の砂岩で、長辺58cm、短辺46cm、高さ38cmの大きさです。

調査時点では蓋はありませんでしたが、骨蔵器内部に成人の火葬骨とともに土師器の杯が発見されました。この杯が蓋として使われていたのでしょう。



納められた専用骨蔵器(右)と鉄板(左)

北側に専用骨蔵器、南側に鉄板が確認されました。この骨蔵器と鉄板を囲むように木質が付着した鉄釘が出土しており、方形の木櫃に納められていたことがわかります。

この火葬墓で注目されるのが鉄板の発見です。鉄板に文字は確認されませんが、墓地を買い取るための買地券あるいは墓誌のような性格が想定されます。

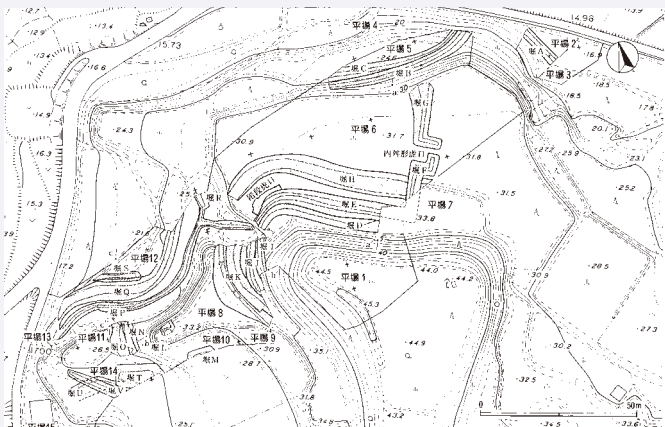


複数の骨蔵器が埋納された火葬墓

南北朝時代から戦国時代へと移行する頃の15世紀になると、防御施設としての本格的な堀や土塁を備えた城郭が全国的に登場するようになります。房総でもこの頃に築かれた城が発掘調査により知られるようになりました。



笹子城跡調査部分全景



調査された笹子城跡の遺構配置図

木更津市笹子城跡

笹子城に関する資料としては、江戸時代に編さんされた『群書類従』合戦部の「笹子落草子」（ささこおちのそうし）が唯一のもので、それによると、真里谷武田氏一族の武田信茂が笹子城主であった時に、天文12（1543）年前後の一族間の内紛をきっかけに北条氏や里見氏も加わって笹子城を舞台に合戦が行われ、落城したと記されています。

笹子城跡は、南北850m、東西400mと県内でも有数の規模を誇り、丘陵全体が城跡となっています。発掘調査は、城域の北端部約10,000㎡（城域の1/30）を対象に実施され、腰曲輪状の平場が大小15か所、堀22条、虎口、土坑、多数のピットなどが確認されました。

出土した陶磁器などから、本城の存続時期は、15世紀中頃～16世紀前半を主体とし、16世紀中頃に廃城に至ったと考えられ、史実を裏付けています。



独鉦杵

護摩などの密教の儀式に用いられる法具で、金剛杵とも呼ばれています。長さ15.3cm、重さ96.1gを測ります。



水晶製の五輪塔

高さ3.2cmときわめて小型の水晶製の五輪塔です。下の地輪部は六角形で、上の火輪・水輪部の内側は削り抜かれています。舍利容器として使われたのでしょうか。



分銅

高さ3.0cm、重さ58.0gで、1gを0.26匁とすると、約15匁の重さとなります。綿や香料などの軽いものを測るおもりと思われる。



和同開珎

中国の宋銭や明銭を中心に200枚以上の銭貨が見つかっています。その中に、日本最古の流通貨幣とされる和同開珎が2枚含まれていました。

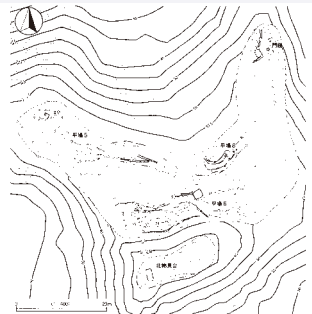
富津市根木田入口山脇砦跡

発掘により、物見台や平場・堀切などが確認されました。出土した陶磁器から、15世紀～16世紀前半に機能した城跡と考えられます。

本砦跡の北の谷を隔てて佐貫城が位置しています。この城の築造時期は不明ですが、永正6（1509）年の佐貫鶴峰八幡神社棟札に「大檀那武田信嗣」とあることから、それ以前に武田氏が佐貫の地に居住していたようです。また、武田一族の内紛による里見氏や北条氏の関与も伺われ、武田氏→里見氏→北条氏へと城主が替わっていったとされています。根木田入口山脇砦跡は、佐貫城主の里見氏との長期戦に備えるために築城された可能性も考えられます。



根木田入口山脇砦跡全体図



平場6周辺の遺構



根木田入口山脇砦跡と佐貫城位置図

参考展示

※このページは木更津市郷土博物館金のすずのみの展示です。

木更津市土器崎遺跡 縄文時代晩期

県道長浦上総線の整備に伴う発掘調査により、小櫃川^{おびつがわ}の旧河道が調査されました。縄文時代後期～晩期の遺物がわずかに出土したのみでしたが、その中に朱漆で塗られた豎櫛が1点含まれていました。県内の豎櫛の出土例はその時点では2例しかありませんでしたが、近年の外環道用地内の調査により市川市内の遺跡から数点の出土が確認されています。

この豎櫛の注目される点は、水銀朱が用いられていたことです。水銀は、限定された地域から産出されるようで、房総では産出されないようです。関東地方の後・晩期の土器に東北地方の影響が少なからず存在することを考えれば、東北地方を介在した入手経路を想定することができます。これだけの貴重品を保有していた有力者が近くのムラに居住していたことを示しています。



朱漆塗りの豎櫛(右半分を欠く)



折れた櫛歯の残存状況



歯材をひもで結び、漆で固定したようす

豎櫛は右半分を欠いています。現状で断面円形の4本の櫛歯が確認されていることから、全体では8本の歯が作り付けられていたと思われます。また、上部には縦に長い台形状の透かしがみられ、欠損部を含めると、2個1対の透かしが装飾として表現されたようです。破損部の観察から、櫛歯材をひもで結束した後に漆で固め、表面に水銀朱を塗っていることがわかります。

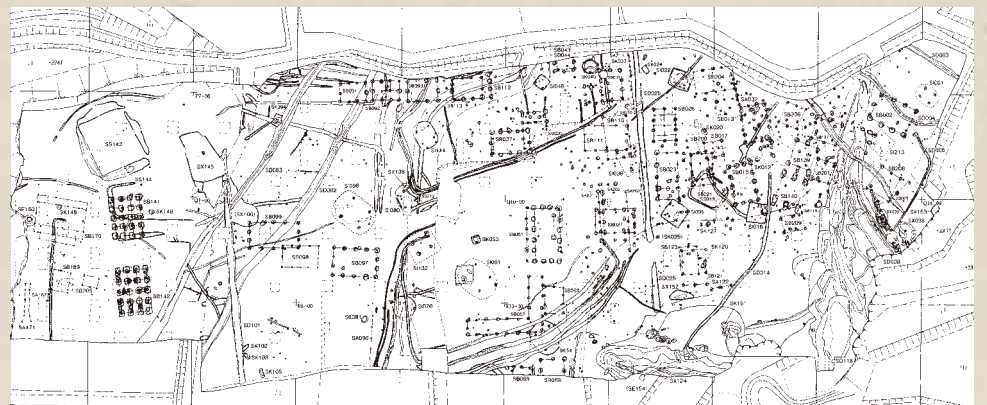
木更津市丹過遺跡 奈良時代

首都圏中央連絡自動車道(圏央道)建設に伴って発掘調査が行われ、奈良時代の掘立柱建物跡37棟以上、塀・柵列9条以上などが確認されています。

この遺跡は小櫃川右岸に位置し、水運を利用した交通の要衝地と考えられています。弥生時代中期から古墳時代前期にかけて環濠や掘立柱建物など有力者が居住した遺構が展開しますが、古墳時代後期は無住の地となります。その景観が一変するのが奈良時代になってからです。2棟の正倉クラスの総柱建物やL字形の長い建物、片廂の建物など、多くの掘立柱建物が計画的に配置された役所的な姿に生まれ変わっていきます。この建物群も8世紀末頃にはほとんど廃絶したようで、きわめて短期間機能していた施設ということになります。役所的な建物群と水運の利用などから想定される遺跡の性格として、古代の「津」(港)機能をもつ、別置された正倉の可能性が指摘されています。



総柱建物跡全景



丹過遺跡全体図

展示関係略年表

	世紀	時代	主なできごと	館山道の各遺跡とできごと
35,000年前		旧石器時代	氷期が続く 狩猟や採集をしながら移動生活	人々が住み始める 袖ヶ浦市関畑遺跡
13,000年前				
10,000年前		縄文時代	草創期 土器をつくり始める 早期 狩猟や採集の生活が続く	
7,000年前		前期	本格的なムラがつくられ始める	
6,000年前		中期	大きな貝塚・ムラができる	
5,000年前		後期		大きなムラが形成
4,000年前		晩期		君津市三直貝塚 木更津市土器崎遺跡
2,500年前		弥生時代	前期 稲作が始まる	
2,300年前		中期	環濠集落の出現、房総でも稲作開始	環濠集落が出現
2,000年前	1世紀	後期	各地に小さな国が誕生、身分の格差	大規模なムラが後期を中心に形成
1,900年前	2世紀			君津市鹿島台遺跡
1,800年前	3世紀			
1,700年前	4世紀	前期	ヤマト王権の確立 奈良に出現期の古墳がつくられる	弥生時代からの大きなムラが継続 君津市鹿島台遺跡
1,600年前	5世紀	古墳時代	中期 倭の五王の時代 各地に巨大な前方後円墳がつくられる	ムラの終息とほぼ同時に古墳が築かれる
1,500年前	6世紀	後期	群集墳の盛行	君津市鹿島台遺跡
1,400年前	7世紀	(飛鳥時代)	645大化の改新	
1,300年前	8世紀	奈良時代	710平城遷都	役所的な建物群 木更津市丹過遺跡 火葬墓が密集して営まれる 君津市踊ヶ作遺跡
1,200年前	9世紀	平安時代	794平安遷都	条里制に伴う水田が成立
1,100年前	10世紀		940将門の乱平定	君津市三直中郷遺跡
(鎌倉時代省略)				
	15世紀	南北朝時代	1467応仁の乱	真里谷武田氏が築城
		室町時代		木更津市笹子城跡
500年前	16世紀	戦国時代	1590豊臣秀吉全国統一	武田氏・里見氏・北条氏の攻防 富津市根木田入口山脇砦跡
400年前	17世紀	江戸時代	1603徳川家康征夷大將軍となる	

●発行日：平成27年7月17日

●編集・発行：公益財団法人千葉県教育振興財団 〒284-0003 四街道市鹿渡809-2

●印刷：株式会社エリート情報社